

ゴータマ=シッタッタ（原始仏教）

2019 年本試

問 8 仏教の実践としての慈悲の説明として最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。 

18
----

- ① 慈悲とは，四苦八苦の苦しみを免れ得ない人間のみを対象として，<sup>あわ</sup>憐れみの心をもつことである。
- ② 慈悲の実践は，理想的な社会を形成するために，親子や兄弟などの間に生まれる愛情を様々な人間関係に広げることである。
- ③ 慈悲の実践は，他者の救済を第一に考える大乘仏教で教えられるものであり，上座部仏教では教えられない。
- ④ 慈悲の「慈」とは他者に楽を与えることであり，「悲」とは他者の苦を取り除くことを意味する。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 8	18	④	2

2018 年本試

問 6 仏教の修行法である八正道についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 16

- ① 快樂と苦行を避け、中道に生きるための修行法が八正道であり、その一つである正業とは、<sup>あ</sup>悪しき行為を避け、正しく行為することを指す。
- ② 快樂と苦行を避け、中道に生きるための修行法が八正道であり、その一つである正業とは、人の行為と輪廻の関係を正しく認識することを指す。
- ③ 六波羅蜜の教えに由来する修行法が八正道であり、その一つである正業とは、悪しき行為を避け、正しく行為することを指す。
- ④ 六波羅蜜の教えに由来する修行法が八正道であり、その一つである正業とは、人の行為と輪廻の関係を正しく認識することを指す。

問 8 次のア～ウは、人間の欲望をめぐる先哲たちの洞察についての記述である。その正誤の組合せとして正しいものを、下の①～⑥のうちから一つ選べ。

18

- ア ブッダによれば、人間が所有欲などの欲望から離れられない原因は、自己という不変の存在を正しく把握していないことにある。
- イ プラトンによれば、不正な行為が生まれる原因は、魂のうちの欲望的部分が、理性的部分と気概的部分を支配してしまうことにある。
- ウ 朱熹(朱子)によれば、人間が私欲に走る原因は、先天的にそなわっている理が、気的作用によって妨げられていることにある。

- ① ア 正    イ 正    ウ 誤
- ② ア 正    イ 誤    ウ 正
- ③ ア 正    イ 誤    ウ 誤
- ④ ア 誤    イ 正    ウ 正
- ⑤ ア 誤    イ 正    ウ 誤
- ⑥ ア 誤    イ 誤    ウ 正

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 6	16	①	2
第 2 問	問 8	18	④	3

2017 年追試

問 1 縁起の法を理解すれば執着を離れることができる理由の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 11

- ① ものはいずれも、永遠の実体をもたず、他のものを原因や条件にして生じたり消滅したりするため、執着する心の根底にある「ものは確固たる存在である」という思いは、誤りであると分かるから。
- ② 外界の存在として知覚されるものは、実際には存在しておらず、知覚する者の心が作り出したものにすぎないので、そのような心をもつ限り、知覚する者は、はじめからすべてのものを手に入れていると分かるから。
- ③ ものはいずれも、永遠の実体をもたず、他のものを原因や条件にして生じたり消滅したりするが、それと同じように、執着する心も永遠ではなく、時間の経過とともに静まっていくのが定めであると分かるから。
- ④ 外界の存在として知覚されるものは、実際には存在しておらず、知覚する者の心が作り出したものにすぎないのであり、「ものと心は同一である」と理解することで、真の自我にたどりつくと分かるから。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 1	11	①	3

2016 年本試

問 4 仏教における煩悩や苦についての説明として最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。 

14
----

- ① 「無自性」とは，煩悩によって自分固有の本性を見いだせないでいる状態を指す。それを脱するためには，快樂にまみれた生活にも極端な苦行にも陥ることのない，正しい修行を実践すべきだとされる。
- ② 人間は現世で様々な苦しみにあうが，なかでも代表的な苦として，生きること，老いること，病になること，死を目の当たりにすることの四つが説かれた。それらは「四苦」と呼ばれる。
- ③ 「三帰」とは，人間の有する様々な煩悩のうち，代表的なものを指す。それらは，貪りを意味する「貪」，怒りを意味する「瞋」，真理を知らない愚かさを意味する「癡」の三つである。
- ④ 人間の身心を構成する，「色」という物質的要素と「受・想・行・識」という精神的要素は，それら自体が苦であると説かれた。そのことは「五蘊盛苦」と呼ばれ，八苦の一つに数えられている。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 4	14	④	3

2015 年本試

問 8 ブッダが初めて教えを説いた際に語ったとされている四諦についての説明として最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。 

18
----

- ① 苦諦とは，人間は誰しも，苦しみを嫌い楽を求める心をもっているという真理を指す。また，集諦とは，そうした思いが積み重なって煩惱が増大するという真理を指す。
- ② 苦諦とは，人間の生の有り様は苦しみであるという真理を指す。また，集諦とは，そうした現実のゆえに，心の集中が妨げられ悟りが得られないという真理を指す。
- ③ 滅諦とは，煩惱の滅した安らぎの境地があるという真理を指す。また，道諦とは，そうした境地に至るための，極端に陥ることのない正しい修行法があるという真理を指す。
- ④ 滅諦とは，あらゆる存在はいつか必ず滅ぶという真理を指す。また，道諦とは，そうした道理を心に留めて，禁欲的な苦行を实践すべきであるという真理を指す。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 8	18	③	3

2014 年本試

問 7 ブッダの示した修行方法である八正道についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 17

- ① 「正語」とは、ブッダの語った言葉を正しく記憶することである。
- ② 「正見」とは清らかで正しい生活を送ることである。
- ③ 「正精進」とは、肉食を避け正しく食事を取るることである。
- ④ 「正定」とは、正しいめいぞう瞑想を行い精神を統一することである。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 7	17	④	2

2014 年追試

問 7 ブッダの教えを表す四つの命題である「四法印」についての説明として最も  
適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。 17

- ① 「諸法無我」とは，それ自体で存在するような不変の実体は何もない，と  
いう教えを指す。また「一切皆苦」とは，一見楽しそうなことも含め，この  
世の現実のすべては苦しみにほかならない，という教えを指す。
- ② 「諸行無常」とは，あらゆる行為は常に変転し続けるので，苦行にも意味  
はない，という教えを指す。また「涅槃寂靜」とは，我執を断った安らぎの  
境地へと至ることが理想である，という教えを指す。
- ③ 「諸法無我」とは，ブッダのもろもろの説法は，すべて「我などない」と  
いう一つの真理を表している，という教えを指す。また「一切皆苦」とは，  
心のなかの煩悩が一切の苦しみの原因である，という教えを指す。
- ④ 「諸行無常」とは，すべてのものは常に変転し続け，とどまることはない  
，という教えを指す。また「涅槃寂靜」とは，聖典に定められた様々な祭祀<sup>さいし</sup>  
の執行を通して解脱に至るべき，という教えを指す。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 7	17	①	3

2013 年本試

問 3 煩悩からの解放に関するブツダの教えの説明として最も適当なものを，次の

①～④のうちから一つ選べ。 

14
----

- ① 煩悩に苦しむ他者を救済することができて，はじめて自らが煩悩から解放されることになる。そのため，他者への慈悲心に基づいて，布施，持戒，忍辱，精進，利他，智慧の六波羅蜜を実践すべきである。
- ② 煩悩に苦しむ衆生の有り様は，大河に流され必死に漂流物にしがみついている姿に譬えられる。この漂流物とは，絶えず変転する物質世界のなかで永続する自己を意味しており，その理解によって人は煩悩から解放される。
- ③ 道諦は苦の滅却に至る道筋についての真理であり，具体的には八正道として示されている。この解脱に至る修行過程は，出家した修行者でさえ耐え難いほどの苦行であるので，煩悩から解放される者は極めて少数である。
- ④ もろもろの煩悩は苦しみや悲しみを引き起こすが，その根本原因は，無常や無我に関する無知にある。それゆえ，この世を貫く理法を正しく悟ることによって，煩悩から解放されることになる。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 3	14	④	3

2012 年本試

問 3 苦についてのブッダの思想の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 

6
---

- ① 苦の原因は、自分が何であるかを知らないという点にある。だから、苦をなくすためには、世界の事物を存在させる原因や条件を超越したものが自分の本質であると正しく認識しなければならない。
- ② 苦の原因は、自分でないものを誤って自分と思い込むところにある。だから、苦をなくすためには、存在するともしないとも言えない不可知なものこそが真の自分であると正しく認識しなければならない。
- ③ 苦の原因は、自分でないものを誤って自分と思い込むところにある。だから、苦をなくすためには、他の事物の存在を可能にする根源的な精神こそが真の自分であると正しく認識しなければならない。
- ④ 苦の原因は、自分が何であるかを知らないという点にある。だから、苦をなくすためには、自分と呼ばれるものは恒常不変の実体ではなく、変化してやまないものであると正しく認識しなければならない。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 3	6	④	3

2012 年追試

問 1 ブッダが苦について示した教えの説明として正しいものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 苦諦とは，四諦の一つで，もろもろの煩惱が苦の原因であるという真理をいう。
- ② 一切皆苦とは，四法印の一つで，この世のすべてが苦しみであるという真理をいう。
- ③ 求不得苦とは，八苦の一つで，求めて得たものを失うことが苦しみであることをいう。
- ④ 五蘊盛苦とは，八苦の一つで，五つの要素からなる心の活動が苦しみであることをいう。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 1	4	②	2

2011 年本試

問 6 人生の苦の問題に関して、ブッダの考え方として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 

10
----

- ① 輪廻などのあらゆる苦悩は、苦・集・滅・道の四諦を始めとする煩悩にまどわされて、苦の原因に気づかずにいることに由来している。
- ② 自己の固有の本質が不変であることを正しく理解せずに、永遠の快樂や不死に執着してしまうために、無知から生ずる様々な苦がある。
- ③ 苦の根本原因は業であり、この世界を貫く常住不変の真理を洞察し、それを理解することによって、一切の苦から解放されることが可能となる。
- ④ あらゆるものと同様に、苦は一定の条件や原因によって生じるものであるから、苦からの解放にはそれらの条件や原因をなくすことが必要である。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 6	10	④	3

2011 年追試

問 7 ブッダが説いた教えとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 

11
----

- ① 人間の肉体や精神を含めて、この世のものはすべて変化してとどまることがないという真理を悟り、自己やその所有物に対する欲望を捨て、平静な安らぎの境地に達するべきである。
- ② 人間の肉体を含めて、この世のものはすべて変化してとどまることがないという真理を悟り、この世のものに対する肉体的な欲望に<sup>とら</sup>われず、真の自己である不滅の靈魂のことを気遣うべきである。
- ③ 宇宙の根源にある永遠の原理と、真の自己である不変の原理とが究極的には一体であるという真理を悟り、個別的な自己やその所有物に対する欲望を捨て、輪廻の苦悩から解脱すべきである。
- ④ 輪廻は行為の結果に対する執着と欲望によるという真理を悟り、生まれついた身分に与えられた仕事にひたすら邁進<sup>まいしん</sup>することによって、輪廻の苦悩からの解脱を目指すべきである。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 7	11	①	3

2010 年本試

問 2 ブッダの教えをまとめた四諦の各々についての説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 

6
---

- ① 苦諦：自分の欲するままにならない苦は，努力で克服するのではなく，人生は苦であると諦めること<sup>あきら</sup>で，心の平安を得られるということ
- ② 集諦：あらゆる存在は，因と縁が集まって生ずるから，実体のない我に固執せず，他者に功德を施すことで救いが得られるということ
- ③ 滅諦：滅は，もともと制するという意味であるが，欲望を無理に抑えようとせず，煩悩がおのずから滅することに任せよということ
- ④ 道諦：快樂にふけることや苦行に専念するという両極端に近づくことなく，正しい修行の道を実践することが肝要であるということ

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 2	6	④	3

2009 年本試

問 6 ブッダの教えとして最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

10

- ① 心を入れ替えて自分を低くし，子どものように無垢<sup>むく</sup>な心となって天の国に入れ。
- ② 社会的規範としての礼儀を身につけ，自らを律して道徳的人格を完成させよ。
- ③ 不殺生などの道徳的戒めを守り，出家して無所有を徹底し恒常不変の創造神を直観せよ。
- ④ 無常・無我の真理を悟り，この世への執着を捨てて心の平静を実現して安らえ。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 6	10	④	3

2008 年本試

問 1 文章中の  に入れるのに最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

輪廻を前提とする古代インド思想においては、現世における境遇の善し悪しは、前世での自らの業(カルマ)に起因すると考えられている。しかしこのことは逆に、現世での業が来世での運命を切り開いていくことをも意味する。それだけではなく、苦しみの多い輪廻それ自体からの解放も、自らが実践する修行を通じて可能になるとされていた。例えば初期仏教では、輪廻に伴う苦しみの原因を分析し、かつ平安の境地である涅槃に到達するための実践を説く  が教えの中心をなしている。

- ① 三 密                      ② 四 諦  
③ 五 蘊                      ④ 六 道

問 6 ゴータマ・ブッダが説いたとされる次の文章では、現世での境遇と業の関係についても述べられている。その趣旨に合致する記述として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

ヴェーダ説誦者どくじゅしやの家に生まれ、ヴェーダの文句に親しむバラモンたちも、しばしば悪い行為を行っているのが見られる。そうすれば、現世においては非難せられ、来世においては悪いところに生まれる。(身分の高い)生まれも、かれらが悪いところに生まれまた非難されるのを防ぐことはできない。生まれによって賤しい人となるのではない。生まれによってバラモンとなるのでもない。行為によって賤しい人ともなり、行為によってバラモンともなる。

(『スッタニパータ』)

- ① 現世での境遇は現世での生まれのみによって決定され、現世での行為は来世での境遇に影響を与える。  
② 現世での境遇は現世での行為により影響を受けるが、現世での行為は来世での境遇に影響を与えない。

- ③ 現世での境遇は現世での生まれによって決定されることはなく，現世での行為により影響されることもない。
- ④ 現世での境遇は現世での生まれのみによっては決定されず，現世での行為は現世と来世での境遇に影響する。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第2問	問1	5	②	2
第2問	問6	10	④	3

2007 年本試

問 2 ゴータマ=ブツダの解脱観の記述として最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。 

6
---

- ① 人は，苦の原因を認識し執着から離れることによって解脱できる。
- ② 人は，自分の中に永遠的要素を見出すことみいだによって解脱できる。
- ③ 人は，身体的な苦行を積み重ねることによって解脱できる。
- ④ 人は，不可知なるものの存在を認めることによって解脱できる。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 2	6	①	3

2006 年追試

問 5 原始仏教では，世界の永遠性や死後の存在に関する問いに答えることは必要ないと考えられたが，このように考えられた理由として最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。 

8
---

- ① この世界で苦悩や欲望にとらわれた人間に必要なのは，その原因を取り除くことであって，それと直接関わらない探求は悟りの妨げとなるから。
- ② この世界で苦悩や欲望にとらわれた人間にとって大切なのは，生への執着を放棄して，ひたすら諦<sup>あきら</sup>めのうちに日々を過ごすことだから。
- ③ この世界で苦悩や欲望にとらわれた人間に必要なのは，それからの解放を可能にする阿弥陀仏の現前であって，人間側の探求は無力だから。
- ④ この世界で苦悩や欲望にとらわれた人間にとって大切なのは，一つ一つ積み重ねるべき難行であって，知的な探求は無意味だから。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 5	8	①	3

2005 年本試

問 1 文章中の  に入れるのに最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ  
選べ。

仏教でいう「慢」は、物事へのとらわれに基づく煩惱の一つであり、己を他者よりも優れていると妄想して他人に対して誇りたがる心の驕りである。その根本には、諸存在の無常性に気づかない「」があるとされる。

- ① 無 記                      ② 無 心  
③ 無 明                      ④ 無 我

問 3 仏教は、恋の執着を、悟りを妨げる煩惱であると捉えたが、この背景にある  
仏教の考え方の記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選  
べ。

- ① この世のすべてのものは一定の原因や条件に依存して生起するが、その不変の本質はそれらの原因や条件を超越している。絶えず変化する現象にばかり心を奪われ執着するところに、迷妄が生まれる。
- ② この世のすべてのものは一定の原因や条件に依存して生起するから、独立不変のものは存在しない。にもかかわらず、自己や自己の所有物を変わらない実体と考え執着するところに、迷妄が生まれる。
- ③ この世のすべてのものは様々な原因や条件に依存して生起するが、それらは根源的な涅槃ねはんの世界の影に過ぎない。その真実を理解せず、自己や自己の所有物を実在と誤認するところに、迷妄が生じる。
- ④ この世のすべてのものは様々な原因や条件に依存して生起するから、元来知によっては捉えることができない。変化する存在に身を委ねようとせず、知を求め続けようとするところに、迷妄が生じる。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 1 問	問 1	1	③	2
第 3 問	問 3	22	②	3

2005 年追試

問 7 『法句経』に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 

7
---

- ① 初期のアーリア文化を伝えているバラモン教の聖典である。祭祀に関する文章や神々への讃歌が収録されている。
- ② 世親(ヴァスバンドゥ)の代表的な著作である。一切は心の表象にほかならないとする唯識派の教理を説いている。
- ③ 竜樹(ナーガールジュナ)の代表的な著作である。一切は「空」にほかならないとする中観派の教理を説いている。
- ④ 原始仏教における最古の経典の一つである。平易な比喻を用いて、簡潔に仏教の世界観や道徳観を説いている。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 1 問	問 7	7	④	3

2004 年追試

問 6 仏教における言葉の問題についての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 

7
---

- ① 言葉は無常なる存在であるが、正しい言葉語ることは、正しい実践の重要な要素とされ、いわゆる「八正道」の一つに挙げられている。また、嘘をつくことは、言葉による苦しみとして四苦の一つとされている。
- ② 正しい言葉語ることは、正しい行為、実践をすることとは別であるとされ、いわゆる「八正道」には含まれない。一方、嘘をつくことは、言葉による苦しみとして四苦の一つとされている。
- ③ 言葉を含めすべての存在は無常な存在であり、言葉を語ることや嘘をつくことは、無常な存在に執着することである。したがって、両者ともに本質的には空しいこととされ、苦しみの原因として「集諦」に含められている。
- ④ 正しい言葉語ることは、いわゆる「八正道」の中の一つとして、正しい実践の重要な要素と考えられている。また、嘘をつかないことは、殺生をしないことなどとともに、いわゆる「五戒」の中に挙げられている。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 1 問	問 6	7	④	3

2003 年本試

問 6 ゴータマ・ブッダが説いた「四諦」(四聖諦)のそれぞれについての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 7

- ① 「苦諦」とは、苦を引き起こす原因として、無知、欲望、執着といったもろもろの心の煩悩があるという真理である。
- ② 「集諦」とは、理想の境地に至るためには、八正道の正しい修行法に集中すべきであるという真理である。
- ③ 「滅諦」とは、煩悩を完全に滅することで、もはや苦が起きることのない平安の境地に達するという真理である。
- ④ 「道諦」とは、あらゆる事物が存在し変化していくには、必ず依拠すべき道理があるという真理である。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 1 問	問 6	7	③	3

2003 年追試

問 2 ゴータマ・ブッダが説いた人間観についての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 

3
---

- ① 人間の身体や心的要素は絶えず変化しているので、自己を永遠不滅であると錯覚したり、これに固執したりしてはならない。
- ② 人間の身体や心的要素は、すべて宇宙の真理に当たる法身仏から派生したものであるから、成仏の可能性は自己に備わっている。
- ③ 人間の身体や心的要素も含めて、この世にあるものはすべて空であり、無自性であるから、自己というものも存在しない。
- ④ 人間の身体や心的要素も含めて、この世にあるものは根源的実在である心の現れであり、自己というものも実は仮象である。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 1 問	問 2	3	①	3

2002年追試

問4 次の仏教伝説は、ゴータマ・ブッダが難しい教理を用いずに俗人を教え導いた姿を伝えている。この伝説を読み、ブッダが母親に与えた指示の意図として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。 5

或る貧しい家の娘が嫁ぎ先で子どもを産んだ。子どもは走り回って遊ぶまでに成長したのに突然死んでしまった。愛児の死に気が動転した母親は、亡骸<sup>なきがら</sup>を抱いたまま、子どもを生き返らせる薬を求めてさまよい歩いた。人々は「死んだ子に飲ませる薬があるものか」と言って彼女をあざけた。

或る男がこの様子を見て、ブッダなら彼女を正気に戻すことができると思い、彼女にブッダのところへ行って薬をもらうように勧めた。彼女がブッダのもとにやってきて薬を求めると、ブッダは、「町に行つて家ごとに訪ね歩き、まだ一度も死人を出したことの無い家から、芥子粒<sup>はしつぷ</sup>をもらってきなさい」と指示した。  
(『長老尼の詩註』 原文を一部省略して引用した。)

- ① いくら家々を回つて探しても指示された芥子粒は手に入らないことを体験させ、子どもを生き返らせる薬が手に入らないのは、母親自身が前世で犯した悪い行いの報いであると諦め<sup>あきら</sup>させるため。
- ② いくら家々を回つて探しても指示された芥子粒は手に入らないことを体験させ、家族の死で悲しみ苦しむのは自分ばかりではないことに気づかせ、人は死を免れえないことを理解させるため。
- ③ 苦勞を重ねて最後には指示されたとおりの芥子粒を手に入れることによって、その芥子粒を用いた供養をして、幼くして亡くなった子どもが来世では幸福に暮らせるように祈願させるため。
- ④ 苦勞を重ねて最後には指示されたとおりの芥子粒を手に入れることによって、困難にめげずにブッダの教えに従い努力を重ね続ければ、人はやがて必ず報われることを信じさせるため。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 1 問	問 4	5	②	3

2001 年本試

問 4 釈尊（ゴータマ・ブツダ）の説いた教えに関する記述として、最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 

24
----

- ① 自己の存在は、他の存在に紛れこんで見失われがちなものであるから、自己が唯一無二で代替不可能なものであることに目覚めよと説いた。
  - ② 自己の存在は、他の存在と競合し合っているものであるから、最終的にはその競合に打ち勝つこと以外に安定は得られないと説いた。
  - ③ 自己の存在は、他の存在とともに、ある根源者によって <sup>つかさど</sup> 司られているものであるから、その根源者と一体化するところに安楽があると説いた。
  - ④ 自己の存在は、他の存在同様、それ自体として独立に存在するものではないから、自己への執着を捨て去るところに苦からの解放があると説いた。
- 。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 3 問	問 4	24	④	3

2000 年本試

問 5 倫理を専ら社会的な規制や規範として語り、それらを形式的に守ることのよしあしだけを論じるならば、我々は社会のあり方と自己との結びつきを断ち切り、人と人との関係のあり方を見失うことになるのではないだろうか。このような問いかけに関して、先哲たちの営みはそれぞれどのようなものであったか。彼らの営みとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ソクラテスについては  に、孔子については  に、ブッダについては  に、イエスについては  に答えよ。

- ① 若いころから様々な知識や技能を習得し、博識の学者となったが、何でも知ることをよしとしたのではなく、知るといふことは知っていることを知っていることとし、知らないことを知らないこととすることだと教えた。
- ② 多神教を背景とする部族社会に生じた不公正な富の配分や利己主義の蔓延を批判し、富裕な支配者層からの迫害を受けながらも、終末の審判を行う唯一神への信仰を説き、その信仰に基づく共同体の建設に努めた。
- ③ 苦しみ、傷つきながら生きている人々の声に聴いて、自己中心的な生き方を越え互いに分け隔てなく愛し合うことを教え、日常的であるが故に形式的な遵守にかたむきがちであった規範を根本的に問い直した。
- ④ 人が苦しみを厭いながら苦しみを重ねていくのは、すべては依存しあつて成立しているという真理について無知であるためだと考え、この真理を正しく知り他者に対しても慈しみの心を起こすべきだと論じた。
- ⑤ 人間は社会的動物であると考え、よき市民がもつべき倫理的な徳は、過多や過少に陥らない行為を反復することによって形成されると論じ、現実的な視点から社会において友愛や正義が果たす役割を考察した。
- ⑥ 秩序の解体の危機に接して、親しい人への自然な愛を人間関係の基本として秩序に主体的に従うことが追求されるべきだと考え、正しい人が人々の上位に立つならば民衆は和合してその人に付き従うと説いた。
- ⑦ 苦行を通じて自己と絶対者との一体化に至ることが一切の苦悩からの解放の道であるという教えに対して、人生の苦しみの原因は自己に執着する

ことにあると考え，恒常不変の自我という存在を否定した。

- ⑧ よく生きることは正しく生きることであるという前提に立って，国法に従うことを正しいと自ら同意したのであるから，その同意を破るべきではないと述べ，不当な判決には服すべきではないと説く友人の言葉を退けた。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第1問	問5	5	⑧	3
第1問	問5	6	⑥	3
第1問	問5	7	④	3
第1問	問5	8	③	3

2000 年追試

問 5 仏教は中国に広まったが、詩人白樂天は禪僧道林に、仏教とは何かと尋ねた。道林は原始仏典の『ダンマパダ(法句経)』以来説かれるアのことばを踏まえて、イのように白樂天に回答した。道林の最後の答えの趣旨として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。 6

ア

諸<sup>もろもろ</sup>の悪をなすなかれ、諸の善を行ぜよ、  
自らその意を<sup>きよ</sup>浄めよ、これが諸の仏の教えである。 (「七仏通戒偈」<sup>しちぶつとうかいげ</sup>)

イ

白樂天： 仏の教えとは、一言で言うと何でしょう。  
道 林： 悪いことをせず、善いことを行うことである。  
白樂天： そんなことは三歳の子供でも言えますよ。  
道 林： 三歳の子供も言えるというが、八十の老人でもこれを実践することとはむずかしいのである。 (『景德伝燈録』<sup>けいとくでんとうろく</sup> 卷 4)

- ① 子供は素直で自然に善いことが出来るが、大人には煩惱が多くむずかしいのである。
- ② 修養して心が清らかでなければ、善いことを自然に行うことはむずかしいのである。
- ③ 善悪は相対的であり、状況に応じて善悪の判断をすることはむずかしいのである。
- ④ 仏教は儒教とは異なるから、両者になつた善いことを行うことがむずかしいのである。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 1 問	問 5	6	②	4

